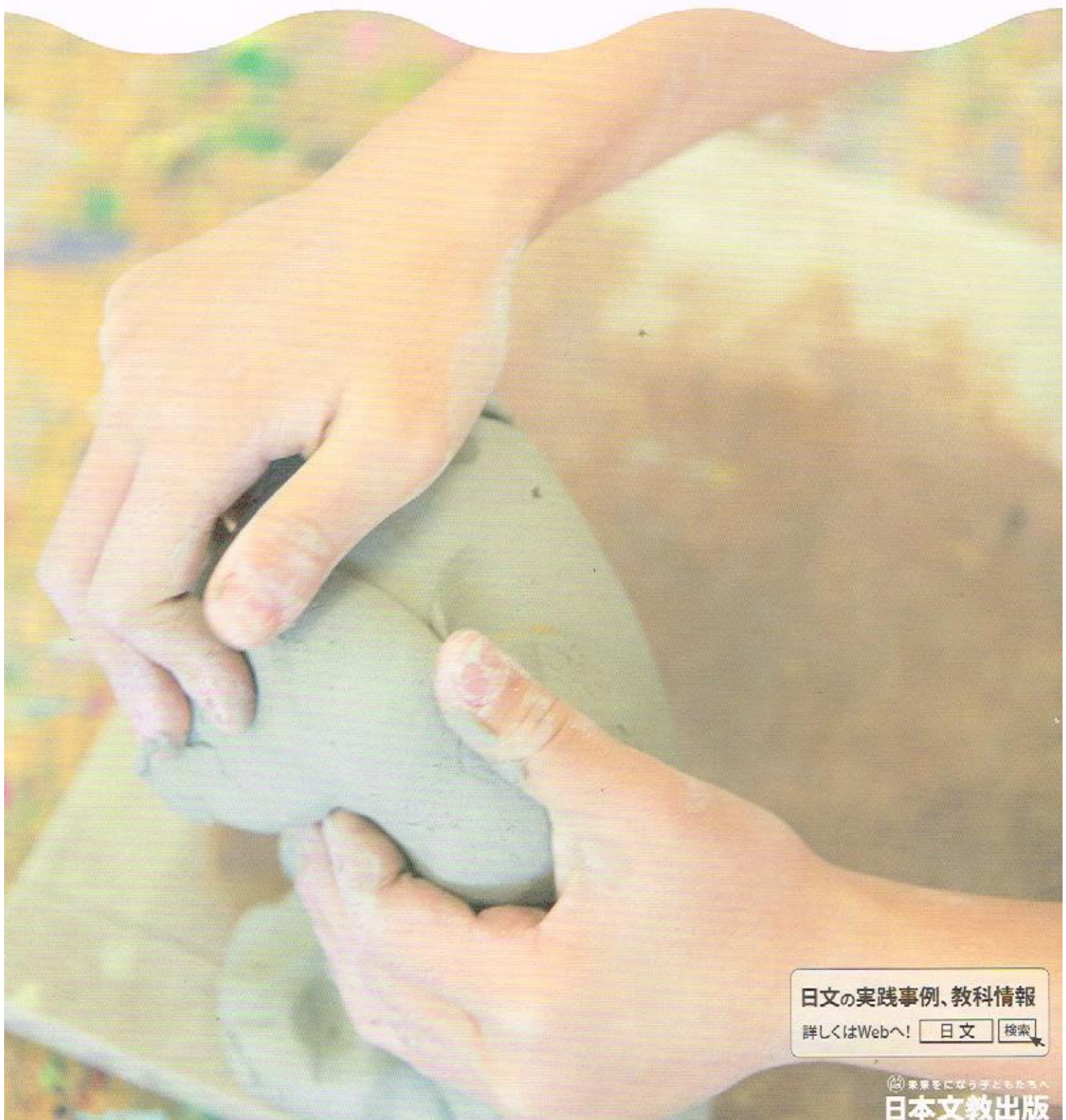


「特集」
ためす

形

forme



日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!



4人の若者が、日夜技術の向上に励む。ワクワクできる日々さえあれば、どんな辛いことも楽しくなる。松岡はそう伝えている。

だが解散後も、松岡はある意図を持ち制作を続けていた。判断の甘さを反省し、再び亀井と飯を食っていくために、どうすべきかを思案。リベンジへの原動力は二点あった。夢半ばで諦めたという後悔。それと、家具を自分で作り、売るという「家具作家」としての生業に眼界を感じていた点だ。彼は見かけによ

らず、自分が作ったものを上手くアピールできないシヤイな性格だった。同時に、従来の家具作家のように、死ぬまで貧乏なのは嫌だった。家具作家を辞め、会社組織の中の一人として活路を見出すしかない。すなわち、作る人間と売る人間を役割分担していけば、再びチャレンジできるだろう。そう冷静に判断した。その頃、

亀井は新築やリフォーム住宅用の造作家具会社に就職していた。騒ぎから一年半後、松岡に何度も口説かれた末、亀井も決断する。今度の二人は、造作家具でも何でも仕事を受けた。十カ月で一千万貯め、法人化に漕ぎ着ける。松岡が作り、亀井が売る、その分担当が軌道に乗ったのだ。亀井は、バイヤーが参考例にするほどの適任だった。途中で取引先の倒産やリーマンショックの煽りも受けたが、今度は倒れなかった。何とか乗り越えられたのは、松岡が一人ではなかったからだ。

これから社会で闘う若者たちへ

ここまでの松岡の成功譚を、人々はどう見るのだろうか。まったくの他人事で、自分はそのままでできない。そう思うのか。それは嫉妬感情の裏返しで、「したいことを見つけた松岡が羨ましい」。本当はそう感じているのではないか。松岡の原点には、家具でもスケボーでも好きだと思っただけのもの。それがあった。だが、彼がその情熱だけしか持っていない。なかつたのなら、社会に潰され継

続はできなかっただろう。白眉だったのは、「好きをいかに続けていくか」を考え、自分の場所を一から立ち上げたことだった。芸術家的な面だけではない、いわば実業家的な側面が共存していた。

松岡のこの道のりを、特に若い人

たちに伝えたいと思う。なにも彼に見習い、勝ち組になるべきだ、と競争を助長しているのではない。まだ何者でもないあなたがやりたいことを見つけ、今後社会の中で表現していきたいと思うかもしれない。松岡には幸か不幸か父親の教育があった。自分がやりたいことを常に問い、未熟でもすべて自分で決断した。その過程があったからこそ、人生の分岐点で自分のセンスに絶対の信頼と自信を持てたのだ。受け身では不利益しか被らないのが今の世。上から押しつけられることに頷いているだけでは、自分を押し通せない。だからあなたには、当たり前のことを当たり前前として受け入れるのではなく、それに疑問を投げかけ、あらゆる選択肢から最良の道を選び出すという感覚を養ってほしい。来たるべき時のためとして、自分の意識を常に研いでおくことが必要なのだ。

松岡は、父親のことを必要以上に話したがらなかった。そこに、彼が挑戦し続けることの原点があるようにも思える。まだ発展途上、どんな未来が掴めるかも分からない。しかし、父親の教えと亀井という最大の伴走者がいる彼は、ちよつとやそつとじゃ崩れることはない。

松岡茂樹 まつおかしげき

一九七七年、東京都生まれ。木製家具会社を経て株式会社KOM設立。無垢木材のオーダー家具が特徴。東京の森を活かすプロジェクトやセミナーショーでの発表等、活動は多岐に渡る。今春、西荻窪に路面店をオープンさせた。

工房前の広場は、コンクリートと車輪が摩擦擦し、鋭い音が響いていた。太陽が真上から見下ろす午後、数台のスケボーが滑走し、跳ね上がる。男たちの色あせたシャツは、噴き出す汗でみるみる黒みを帯びていく。炎天下だろうが極寒だろうが、ここに訪れた誰もが見る光景だ。競技場に迷い込んだわけではない。これが彼らの休憩の過(こ)し方なのだ。

家具もスケボーもどっちも好きだし、今よりも上手になりたい。だから練習する。それが彼らの行動の基本だ。仕事でもなんでも、そうしたいと思つたことを自分たちはやっていくだけ。彼らはそういうだろう。自分のしたいことが分からない……多くの人がそう眩く今、この行動原理は特異に映ることだろう。

株式会社KOM A。東京の端、武蔵村山の工房で家具を作っている。トップは松岡茂樹。伴走するのは亀井敏裕。そして修行半ばの若者たち。彼らの家具の特徴は、無垢の木の素材をいかしたゆるやかなフォルム。機能性を追求する中で必然的に生み出された曲線、その繊細さが際立つ。しかし、わたしが見た松岡は、どこかボクサー風情でやんちゃさが漂う。スポーツ選手と職人……ワールドは違えど、腕ひとつで這い上がってきたという自信に錯覚させられるのか。作られたものと作り出した人物、そのギャップが面白い。

父親の教育が子に与えたこと

松岡は、広告代理店の社長と中学校教師の両親の間に生まれた。恵まれた環境……そうではなかった。「オレが高校に進学させて欲しいと言うと」「何をしに高校行くんだ、大工にでもなれ」そんな言葉が返ってくるような父親だった。幼い頃から、父親を納得させる理由がないと相手にしてもらえない。欲しいものがあり、自分なりの理由を一生懸命考えるのだが、首を縦に振ってくれないのだ。「じゃあ、高校にはどうやったらい行かせてくれるの?」「入学金を持つてきたら三年間面倒みてやる」とことん突き放された。だから、彼は高校入学前の春休み、引越のバイトをして十八万円貯めた。

そうまでして入った高校だが、結局遊びに明け暮れた。改造したバイクで仲間と疾走する、典型的な「不良」の毎日。何とか卒業に漕ぎ着けたものの、父親に家に毎月十万円入れるか、出ていくかを迫られた。後者を選択したが、自分のしたいことがなかった。そんな中、部屋で寝そべっていると、昔の住人が天井に貼っていた絵の痕跡に目がいった。そのういえば、オレ絵が好きだったよな。思い出した。小学生の頃、絵画展やボスターコンクールにはいつも入賞していた。一念発起し、友人が通っていた美大の予備校に潜り込む。好きだった絵は、ここでも褒められた。だが、疑念が頭をもたげる。「絵を描

いて、今後何になる?」。すべてのことを当たり前と思わない……幼い頃から教え込まれたあの教えが顔を出した。「アーティストやデザイナーだつて絵を元にした職業なんだよ」。予備校講師の言葉に、絵で飯が食えることを初めて知った。

彼が頭角を現したのは、専門学校でのインテリア科を卒業後、就職した木製家具製造会社だった。面接で「会社の技術は三年で会得し辞めます」とぶち上げた。最低十年と論されたが、絶対ここで一番になってやると豪語。しかし、仕事を始めると自分の技術が通用しないことに驚く。周囲は、向いてないから辞めると大合唱。だから意地でも、通常業務に加え自主練と椅子制作を怠らなかつた。八時半始業の二時間半前には入り、十八時終業のところを二十二時近くまで居残った。

そんなある夜、作業をする彼の脇に立つ人間がいた。社長だった。「お前が入社した時は、どこの不良が入ってきたかと思つたよ。大口叩くやつはすぐ逃げるのに、お前は毎日続けている。さすがに褒めるしかないな」。会社で初めて褒めてもらったことが嬉しかった。「もうちょっと辛抱しろよ、そうしたらお前に何かプレゼンとしてやる」。まもなく、松岡がデザインから制作まで掌握できる社内ブランドが立ち上がった。入社二年の若造が四人の親方たちと肩を並べる異例の抜擢。だから、以後も一日一晩寝る間を惜しんで椅子を作った。専

属の営業担当がデパートに卸す椅子は、月三〇〇万を売り上げた。これで名実伴った。周囲も納得せざるを得ない。

だが当の本人には、いつもの疑問が浮かんでいた。「この上ってあるのか?」。次は路面店を作りたい。それを目標に設定し、社長に提案した。だが、却下された。会社がそういう環境を作らなかつたら、オレがワクワクできない。有言実行で掴んだ地位を、自ら降りた。

「もの作りはひたすらやりますよ。努力の人だし……いわば家具を作ることに関しては秀才なんです。でも、生きていくことに関しては天才かもしれない」。松岡の最大の理解者、亀井敏裕の評だ。

唯一無二の伴走者を見つける

二人は専門学校の同級生。影金を専攻していた亀井は、卒業後フリーで宝飾品などを作っていた。会社を辞めた松岡は、工房をシェアしようと亀井に声をかける。プラスチック専攻の知人も呼んだ。三人の個性で科学反応を起こしたい。個人事業主の集団「デザインワークスKOM A」が走り出した。だが、膨らんだ夢は一年であっけなく破裂した。亀井が、飯が食えないのを理由に抜けたのだ。それに松岡が反発した。結果、救急車が出動する騒ぎとなる。

1

127,336,619

文：田野隆太郎 写真：新井卓

第三回

松岡茂樹

家具職人とは、何も長髪をバンダナで束ねた仙人のような人だけを呼ぶのではない。ここに容姿や生き方、すべてに一線を画す元不良少年がいる。テレビで特集されるほど成り上がった半生。繊細な仕事からは想像できない型破りな道を、彼はいかに開拓したのか。

松岡のバイクは、10代から愛用したもの。家具同様、修理しても使い続けたい。そう思えるものか好きだ。奥が亀井。